「JLC 日本語スタンダーズの意義と教育への応用」

東京外国語大学留学生日本語教育センター　坂本　惠

0　はじめに

言語教育における「スタンダーズ」

米国　"Standards for Foreign Language Learning"

"The ACTFL（American Council on the Teaching of Foreign Languages）

カナダ"Canadian Language Benchmarks"

欧州　"Common European Framework of References for Language:

Learning, teaching, assessment"

外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠

日本　国際交流基金「ＪＦスタンダード」

東京外国語大学留学生日本語教育センター「JLC 日本語スタンダーズ」

1　JLC 日本語スタンダーズ

○JLC 日本語スタンダーズの大枠

1　4技能＋1　の全体の大きなフレームの中で必要なものからなる骨を取り出す

2　レベルは初、中を二つに分け、上を加えた5段階

3　ゴールに達成するために各技能、各レベルでその段階での行動目標をあげ、それに必要なスキルを加える

4　Can-do statement

5　アカデミック・ジャパニーズに特化

○「JLC 日本語スタンダーズ」の特徴

FL あるいは SL としての外国語によるコミュニケーション能力の記述とスケール化

言語要素にかかわる知識面の記述ではない

コミュニケーション能力の漸増性、連続性を生かした包括的な記述

コミュニケーション能力にかかわるパフォーマンスの課題に注目した記述

実際のコミュニケーション能力に焦点を当てた学習者中心の記述

枠：言語運用場面の特定、言語運用領域（技能別）における課題の特定、言語運用能力段階（レベル別）におけるコミュニケーション能力の特定

能力記述：包括性（抽象的記述）・個別性（具体的記述）

○注意点

・スタンダーズは考え方を示したもの　意識の共有を目指すためのもの
　何のためにその練習をするのか　という意識改革を目指す
・教育のための共通の言語、物差しとして
・絶対の基準、教育を縛るものではない、記述は一例を挙げたもの
・スタンダーズ表に完成はない、教育を反映させ、常に改訂を続けるもの
・狭義のアカデミック・ジャパニーズに特化した最低限の骨を示す。
　コース、プログラムにより必要なものを追加
・スタンダーズ表は各技能のある一面から見たもので、実際の力は総合的なもの
・要素、項目的なものは別に示す

○スタンダーズ作成の意義、スタンダーズの役割と機能

学習者は　到達目標を明確に理解できる、異なるレベルでの具体的な能力の把握が可能
　　学習活動の意味づけが可能、学習ニーズと学習内容を客観視できる
　　学習の進歩度を自己評価できる

教師にはカリキュラム策定、評価、教材開発、教員養成などについて明確な方向を示す
　教師間の意識の明確化、意思疎通の際の教育のスケールとして働く
　将来的には複数の機関間でのスタンダーズによるレベル認定基準として（今後の課題）

○これからの教育に役立てるために

それぞれの機関、コースでの「スタンダーズ」作成

2　教育プログラムへの応用

○東京外国語大学留学生日本語教育センターでの教育

・学部進学予備教育（1年コース）　技能別（聴解、読解、口頭表現）の時間の充実
　冬学期「総合」　最終的な成果物として「レポート」「発表」
・交換留学生などのためのコース（全学日本語プログラム）
　「総合」科目中級レベル（週5コマ15週）　3回の口頭発表＋作文
　クラスで統一したテーマ：食文化、教育制度、失業問題
　読解で語彙導入、発表のモデル提示、個別指導

○中国　赴日本国留学生予備学校博士班　留学予定の大学院生の予備教育

大きな目標設定：①日本の大学院の研究室でのディスカッションに参加できる
　　②コース修了時（中級）に口頭発表「自分の専門をわかりやすく話す」
　　③レジュメ作成・質疑応答・ディスカッション

ゴールの設定：「話す」自分の専門をわかりやすく話す,
「聞く」授業・口頭発表がわかる
「聞く話す」口頭発表の司会・質疑応答,ディスカッション
「書く」口頭発表内容をレポートにまとめる

カリキュラム・時間割の工夫
①文法内容を厳選,技能別の学習時間に充てる
②表現（口頭・文章）：毎週時間を取る
③聴解・読解：文章の構成に焦点を当てた学習
④その他：発音,宿題（日記）
⑤スタンダーズ以外の教育：会話,日本事情

成果
・「わかりやすく話す」という目標を与えたことで目標が明確になり
ディスカッションも活発に行われ、よい口頭発表ができた。
・終了時の口頭発表は中級終了段階としては、内容面、日本語力の面、
聞き手に伝わるというコミュニケーションの面でも優れたものとなった。
・学習者に運用に関わる目標を与えることができた。
・結果として自信をつけることにもなった。
・教育の成果が目に見える形で実感された。
・学習者のいろいろな面を引き出すことができた。

○「ＪＬＣ日本語スタンダーズ」を使う意義
・よりどころにするものがあるとカリキュラムが立てやすく、目標が明確になりやすい。
・教師間の意思統一が図りやすい
・口頭表現、文章表現、聴解、読解も共通の目標を持ったカリキュラムを立てることができ、各技能を連携させ、統合的な教育が可能になる。
・学生に目標を示すことができる。
各機関、プログラムで作成する必要がある

３　授業の実際　中級聴解を例にとって
○文章の構成を理解する
・未習語、細部にとらわれることなく、全体を大づかみに理解する
・段落にわけ、段落ごとをまとめる言葉を見つける
・段落間の関係を理解し、全体の構成をつかむ
・構成表を作る

・要約を書く

○表現

・具体的な例を抽象化する、抽象化された言葉から具体例を考える
・わかった内容を自分の言葉で再現する
・洗練された表現を学ぶ
・聴解テキストをモデルスピーチとして扱う
　接続詞、メタ言語などの使い方を学ぶ
　発音、イントネーション、キーワードの卓立などの音声面

○練習方法

・「見ながら聞く」練習
・構成表、要約を書く
・口頭で再話させる
・内容についてのディスカッション
・次の週に語彙クイズ
・聞いておもしろいもの、知識が得られるものを聞く

参考文献

東京外国語大学留学生日本語教育センター『JLC 日本語スタンダーズ』2011 版
東京外国語大学留学生日本語教育センター編（2011）『報告書　世界的基準となる日本語スタンダーズの構築』
坂本惠（2011a）「JLC 日本語スタンダーズ」の教育プログラムへの応用―中国赴日本国　学生予備学校博士班 2010 の基礎日本語教育」『国際日本研究センター日本語・日本学研究』第 1 号　東京外国語大学国際日本研究センター
坂本惠（2011b）「アカデミック・ジャパニーズの聴解」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 39 号東京外国語大学留学生日本語教育センター